The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フエリックス・ガタリにおける記号論の構築 ： 『分子革命』の三つの記号系
Author(s)	山森, 裕毅
Citation	年報人間科学. 2011, 32, p. 153-171
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11617
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈論文〉

フェリックス・ガタリにおける記号論の構築（1）
―『分子革命』の三つの記号系―

山森　裕毅

〈要旨〉

フェリックス・ガタリは政治活動家であり、精神分析家である。本稿では彼のこの二つの側面に一貫性を与えている基礎的な理論として、彼の記号論があることを主張する。彼は『分子革命』（一九七七）において、「記号論の構築」を掲げている。これは彼も従事している精神分析の記号観・言語観を批判する試みであった。ガタリはラカンの精神分析をシニフィアンの記号学と呼び、欲望をコントロールする支配的な記号学として批判する。この批判を通して、ガタリは精神の病や社会現象などの結びつきを思考するために、記号系の三分類を提案する。

ひとつ目は、「非記号論的コード化」と呼ばれるもので、ＤＮＡの発生論的コードやホルモンの内分泌の調整などを指す。ふたつ目は、「意味作用の記号学」と呼ばれるもので、「象徴的記号学」と「シニフィアンの記号学」に下位区分される。三つ目は、ガタリ記号論の核心に当たる「非シニフィアン的記号論」である。ここで特に重要となってくるのが「ダイアグラム（図表）」の記号機能である。ガタリのいう欲望の生産性を作動させるのがこのダイアグラムの記号機能である。

本稿ではさらにこれらの記号系が政治や権力とどのように関わり、それに対してガタリが権力に抵抗するためにどのように記号を実践するのかを見る。

キーワード

シニフィアンの記号学、非シニフィアン的記号論、ダイアグラム、権力構成体、言表行為の集団的アジャンスマン

はじめに

フェリックス・ガタリはフランスの精神分析家であり、哲学者ジル・ドゥルーズとの共著『アンチ・オイディプス』で名を広く知られるようになった。ジャック・ラカンの弟子のひとりであるジャン・ウリに師事し、彼の運営するラ・ボルト精神病院に勤めた。そこで精神分析を集団生活に応用する制度分析を実践した。また制度分析を社会現象にまで適用できるように拡張した分裂分析を考案し、学生時代から深く関わっている政治活動を通してそれを実践していった。

ガタリの単著は、一九五五年から七〇年までの活動をまとめた『精神分析と横断性』（一九七二）から始まる。さらに『分子革命』（一九七七）、『機械状無意識』（一九七九）、『三つのエコロジー』（一九八九）と続き、『分裂分析的地図作成法』（一九八九）で難解さと思想の完成度がともに頂点に達する。そして『カオスモーズ』（一九九二）が遺作となる。これらの間にドゥルーズとの二冊の共著『アンチ・オイディプス』（一九七二）と『千のプラトー』（一九八〇）が位置付けられ、ガタリ思想の展開と一貫性を見通すことができる。

ガタリの思想を大きくまとめるなら、精神分析と権力が交差する領域、つまりオイディプス、ファルス、シニフィアンといった、主体を言語や法秩序へと参入させる構造への批判であったといえる。この批判を行うためにガタリのジャルゴンとして、転移に対する「横断性」、構造に対する「機械」、言語として構造化されている無意識に対する「機械状無意識」、精神分析に対する「分裂分析」などが考案されている。その他にも「ブラックホール」や「顔貌性」、「脱領土化」など使用のされ方が把握しにくい概念も多数ある。

本稿では、これらの難解な概念を網羅的に説明することは目指さない。かといってそれらを既知のものと見なして使用することもしない。そうではなく、これらの概念の理解につながるようなガタリの基礎となる理論を特定することを目指す。私たちはそれをガタリの記号論に特定するつもりである。

なぜ記号論なのか。ガタリは一九六六年に「記号から記号へ」という論考を発表している。記号を主題的に論じたものではこれが最初のものである。これはガタリがラカンのセミネールを数年聴講して考えたことを、ラカン自身に手紙で送ったものを原型としている。ここでは、ラカンの精神分析の中心概念であるシニフィアンに対する批判が行われている。ここでのシニフィアンとは主に、世界に生まれてきた主体が世界の秩序に参入するために自己を抹消しつつ同一化する「一なる徴（le trait unaire）」、あるいは原初的シニフィアンを指す。ガタリの批判は非常にシンプルである。ラカンのシニフィアンとは言語におけるもので、言語的シニフィアンになる以前の記号があるのではないか、あるとすれば記号はどのように生成し、どのような経緯でシニフィアンになるのか、といったものである。これを解釈するなら、シニフィアンが可能にする秩序以外にも記号が機能を持つ領野があるのではないか、ということになる。つまりガタリの精神分析批判の一端は、精神分析が寄って立っている言語観・記号観を問いに付すことにあった。

「記号から記号へ」以降、ガタリは継続的に記号論を研究している。『分子革命』においては「記号論の構築」という章題でいくつかの論考をま

とめている。ここでは「欲望のミクロ政治学に向かって」や「意味と権力」において「記号から記号へ」よりもさらに体系的に独自の記号論を提示している。さらに『機械状無意識』では、精神分析に語用論[1]と動物記号論を導入して、分裂分析なるものを作り上げていく。また『アンチ・オイディプス草稿』出版のおかげで、「記号から記号へ」と『分子革命』の間にガタリがどのように記号論や言語学の研究を進めていったかがわかるようになった。

彼が参照先としてその名を挙げている言語学者・記号論者には、ソシュール、チョムスキー、デリダ、グレマス、バルト、オースティン、サール、バフチン、バンヴェニスト、ヤコブソン、オズワルト・デュクロ、クリスチャン・メッツなどがおり、なかでもパースとイェルムスレウには大きな影響を受けている。その他にもサイバネティクスや分子生物学、生態学などを記号論の観点から論じようと試みているなど、ガタリの記号論への執着がうかがえる。彼の記号論の構築の試みは、一見すると一般記号論の創設とみなすこともできるほど射程の広いものである。しかし彼の意図が無意識と欲望に深く関わる仕方での記号論の構築にあったために、一般的とは言い難い偏りを含んでもいる。それでもここから、彼の記号論の構築が彼の思想において大きな比重を占めていたことを見て取ることができる。

精神分析の言語観・記号観を、日々進展していく言語学・記号論の研究に従って更新していくこと、これがガタリの記号論研究の狙いであるといえる。そしてここからガタリの考えを次のように代弁できるだろう。「無意識が言語として構造化されているのはごく一部であり、無意識はより広く記号の働きに開かれている」。

本稿では、ガタリが記号論を体系化し始める『分子革命』の「記号論の構築」を集中して扱う。理由のいくつかを挙げると、まず記号論研究の発端である「記号から記号へ」ではまだ精神分析の言語観・記号観からまだ十分に距離を取れておらず、シニフィアンを批判した上で記号論の体系化する準備ができていない。また『アンチ・オイディプス草稿』では、ステファヌ・ナドーの編集により記号論や言語学に関する貴重な手記がまとめられている。しかし草稿という体裁上ガタリの曖昧で不十分な記述や、彼の出版物には見られない概念などを含んでおり、本稿では主題としては扱わない。さらにガタリの記号論のほぼ完成型を提示したといえる『機械状無意識』は、いきなりそれ自体で理解するには難解である。やはりガタリ記号論の導入としては、『分子革命』での記号論の基礎的な構築場面を押さえることから始めるのが適当であろう。つまり本稿は、ガタリの記号論の一連の展開の中間部に焦点を当てるものである。「記号から記号へ」、『アンチ・オイディプス草稿』に代表される前半部や、『機械状無意識』に代表される後半部を主題として扱うのはそれぞれ別の機会に譲るとしても、本稿はそのためのひとつの視点を提供するものになることを目指す。

（本稿では「記号学」と「記号論」という用語を頻繁に用いる。前者は主に sémiologie の訳語、後者は主に sémiotique の訳語に当たる。記号学はソシュールに由来する。言語学を記号の中心的な位置に置くことで、言語の働き方からその他の記号の働き方を考察するものである。記号論は言語を記号の一種とみなし、広く記号機能や記号過程を捉えようとす

るものである。こちらはパースに由来する。ガタリがこの区別を意識的に導入するのは『機械状無意識』からであり、それ以前は取り立てて区別せず乱雑に用いている。とはいえ非常に有用な区別であるので、本稿では慎重に『分子革命』の記号論に適用した。そのため、ガタリの原文で sémiotique と記されている場合でも、その内容によって「記号学」と訳した。)

一．精神と記号　ある女性の事例

ガタリは「意味と権力」のなかで、彼自身の患者ではないひとりの女性患者の物語を記している。精神が記号とどのような仕方で関わっているとガタリが考えていたかを示すために格好の素材なので、簡略にまとめて確認しておこう。

この女性患者は、

① 本人が生まれる三か月前に母親が妊娠性の嘔吐に見舞われている。
② 本人は生まれて六か月目に食物アレルギーを起こす。
③ 三歳の時に全身に湿疹ができる。
④ 六歳で登校拒否。
⑤ 二十歳の時に不安神経症の発作に襲われる。
⑥ 三十歳の時に非特異性膣炎にかかる。
⑦ 四十歳の時に自殺未遂。

ガタリはこの女性についての記述から、家族関係や原抑圧など精神分析で主題となるような事柄には言及せず、「この病歴のひとつひとつの段階に、明らかに異なった記号部門が関わっているように思われる」(RM, p.299)と述べている。では、それはどのような記号部門と関わるのか。ガタリの考察をまとめてみよう。

① 妊娠性嘔吐のような障害の発現は、特定の個人に留まるものではなく遺伝するとされる。ガタリが考えるに、ここでは象徴的機能を果たす記号組織が機能している。これを「象徴的記号学」と呼ぶが、これは発話の場合のようにメッセージの送り手と受け手を完全に判別するというようには機能しない。むしろメッセージは言語的チャンネルではなく、身体、身振り、音、姿勢などを通して伝えられる（象徴という用語を使用しているが、言語から独立している点でラカンのいう象徴界とは一致しないことに注意する必要がある)。
② これも象徴的記号学と関わり、かつ①の時よりも象徴的記号の重要性が増しているとされる。というのはガタリによれば、子供は生まれてから、様々な音や寒暑の印象、光、もののぶつかり合い、他者の顔への関わりなどからひとつの世界についての諸々の座標を作り始めるのだが、アレルギーはこの新しい世界への参入に対して子供の皮膚に現れた拒絶を表している可能性があるからである。つまり、身体における病的徴候が、自己と世界との折り合いのつかない関係や不調和の象徴的記号となっているということである。
③ ガタリによる記述はないが、象徴的記号学と関わっていると考えられる。
④ 学校への参加は、制度の言語や大人の言語などの「シニフィアンの記号学」の世界への参入に関わるとされる。学校に入ることは嘔吐や

湿疹などの象徴的記号学がその埒外にある社会法則の世界に入ることである。要するに湿疹ができても罰せられないが、計算ができなければ罰せられる世界への参入である。ここで一連のミクロな社会権力、つまり家庭や学校、地域権力が出現し、やがて国家権力にまでさかのぼる。

⑤　青年期に固有の統合失調症的な徴候であり、思春期の記号的構成要素（世界との新しいタイプの関係、未知を前にしての不安、周囲からの抑圧など）と関わっている。そのような不安や抑圧をもたらすのは、リセや職業訓練校、スポーツクラブ、レジャー組織などの青年が関わることになる権力構成体（formations de pouvoir）である。その権力構成体が青年の欲望に襲い掛かり、自閉へと導くように威嚇している。

⑥　一見すると象徴的記号学に分類されそうであるが、ガタリは夫婦生活という女性患者にとって新たなミクロな社会権力との関わりを指摘している。

⑦　ここでも医学、警察、宗教などの権力構成体との関わりがあるとされる。

以上をまとめるなら、全体を通して個人と世界とが記号を介して関わっていることが示されている。そしてその記号は一通りのものではなく、成長を通していくつかの記号系へと参入し、それらと多層的に関わることになっている。まず①から③までは象徴的記号学に関わっており、これは言語とは区別されている。④から⑦においては言語や意味と関わるが、そこでは制度の言語や大人の言語といわれるように権力構成体との関わりも生じる。個人は社会生活を営む限り何らかの制度や組織に属することになり、個人の生や欲望は、権力構成体との関わりのなかで言語を介して意味を与えられることになるのである。ガタリの見解としては、患者が精神の病を患うのは、このような言語‐意味‐権力構成体との関わりにおいて、ということになる。ガタリが精神分析に向ける批判のひとつは権力構成体の分析が欠けているという点である。

二．意味と権力

では、なぜ権力構成体の分析が必要となるのか。それを知るためにはまず言語と意味と権力構成体の関係について、ガタリが何を考えているかを考察する必要がある。

ここでガタリの次のような思考実験を追ってみよう。まずガタリ自身がある部屋からしばらく姿を消したあと、ドレスを着て戻ってくるとする。このとき起こるべき事態を彼は次のように想定する。まずガタリ自身が性的倒錯者であることを表明する。このときその部屋にいる人間がすべて性的倒錯者なら何の問題も引き起こさないだろう。しかしその場所が聖職者の会合であれば、ガタリの発言はまったく違う意味を持つことになる。あるいはこれが精神病院内での出来事ならまた違った意味で解釈されるだろう。

つまり発話も含めある個人の行為の意味は、その個人が何者と見なされるかによって変わってくる。このとき何者であるかの判断は、その場で支配的な権力構成体の側からなされる。「意味作用の把握は権力のありかとつねに分かちがたく結びついている」（RM, p.308）。そして発話や

行為の意味はその場での権力関係の揺れ動きとともに変化するのである。

さて、ここで言語とはどのようなものとして考えられているのか。ガタリの記述から少なくとも三つの特性を取り出すことができる。

まず一点目だが、言語はシニフィアンの記号学にとって特権的な記号と見なされている。ここでシニフィアンという概念につて概観しておこう。シニフィアンは言語学者ソシュールによって提示されたものであり、シニフィエという概念と対をなす。ソシュールは前者を聴覚映像、後者を概念を指す用語として考案したが、一般的には前者は記号の表現面、後者を記号の内容面として捉えられている。そしてシニフィアンとシニフィエの結びつきは、概念「犬」を指すのに日本語でイヌ、英語でdogというように、必然性がなく恣意的であるといわれる。この一対の概念は、ラカンによってその恣意性を批判される形で精神分析に導入される。そしてフロイトによる無意識における文字の役割の重要性や言い間違いなどとの関わりから、とりわけシニフィアンのシニフィエに対する優位がいわれることになる。またラカンにおいてシニフィアンは、「父の名」が母の欲望をシニフィエとするシニフィアンであり、それがさらに母への主体の欲望を禁止する「父の否」というシニフィアンとなって、主体を法が機能する世界へと引き入れるという重要な役割を担っている。精神分析におけるシニフィアンの機能を長々と説明することはここではしないが、重要なことは、シニフィアンは主体の欲望を挫折させ、享楽を不可能にさせつつ、主体を法や秩序、意味、他者の欲望の世界へと導入する働きを担っているという点である。

ガタリが考える言語の特性の二点目は、言語それ自体は意味を持たないというものである。意味を産出するのは権力構成体である。すると言語が意味を持つのはそれが権力構成体において使用される場合に限られる。発話者はつねに何らかの制度や集団に帰属しているのであるから一見当然であるが、これはガタリの言語論において根本的な事態を指している。というのは、意味のある発話がつねに権力構成体に基づいていることになれば、意味は、（言語それ自体だけでなく）発話者が言おうとしたことや言いたいことなどの、個人的な意図や欲求にも還元することができないのである。ここにはガタリによる「言表行為の主体は存在しない」というテーゼが暗に含まれている。(2)

では、それはどういうことだろうか。ここまでの議論から、発話者の言表や言表行為はある特定の権力構成体において意味を持つものに限られることになるといえる。そして権力構成体はさまざまあり得るのだから、言語が意味を持つ仕方もさまざまあり得る。例えばある個人が家庭では父親や夫として、職場では上司あるいは部下として、ある時は労働者としてまたある時は消費者として発話するように。すると言表行為はこのように、家庭・労働・経済などの集団性によってこそ機能すると考えられる。またそれらは多層的に重なり合うだろう。ある個人の発話は根底でこれら集団性に支えられていることになる。これが「言表行為の集団的アジャンスマン」とガタリが呼ぶことになる事態の一側面である（この概念にはさらに複雑な内実があるので五節でさらに取り上げる）。

このような権力構成体との関わりのなかで言語とは、その権力構成体を体系化し構造化するものであり、社会的な場における価値や行動規範

に仕える道具としても見なされている。また倒錯者の表明の例がそうであったように、ガタリの思想においてシニフィアンとシニフィエの意味を生み出す結びつきの恣意性が復活しており、政治的・社会的な恣意性といわれることになる。ラカンが意味をシニフィアンの可能な用法の束とみなすとき、ガタリであればさらに、これを束ねているのは権力構成体であり、その束ね方もその在り方に委ねられているというだろう。

そして三点目となる特性は、言語には翻訳可能性があるということである。それは言語間での翻訳ではなく、別の記号系の間での翻訳である。「意味と権力」においては次のようにいわれている。女性患者に関する記述で見たように、言語記号以外に象徴的記号学がある。象徴的記号学とは、ダンス、マイム、神経症の発作、号泣、叫びなど、「ただちに理解できる直接的な様式によって自己表示する一切の表現手段」(RM, p.305)とされている。これは言語に頼らない表現手段であり、子供や精神病者によって使われることの多い欲望の表現である。それに対して精神分析家は、翻訳=解釈のシステムを構築することになる。これによってあらゆる欲望の表現を同一の翻訳言語に納めることができるようになり、精神分析は象徴的記号学をコントロールするといわれる。

結局、以上のガタリの言語‐意味‐権力構成体の分析から帰結することは、私たちが言語を使用する限り、そこには何らかの権力が浸透しているということである。そして発話することは揺れ動く複雑な権力関係のなかに身を置くということである。言語の使用は、政治的・社会的・制度的・集団的行為であり、精神分析のやるように家族的・性的コードで一元的には解釈しきれない射程を持つ。しかしそれでも、例えばあなたの発話や表現の意味を解釈するように権力構成体は働きかけてくる。どの権力があなたの欲望を解釈し、コントロールしようとしているのか。ここに権力構成体の分析が必要になる。そして精神分析もまた、子供や精神病者の欲望の表現を家族的・性的コードを通して言語化することでその欲望をコントロールしてしまうひとつの強力な権力構成体なのである。そしてこの点がガタリ記号論における問題提起となるだろう。言語あるいはシニフィアンの記号学によるコントロールを逃れる欲望や、言語として構造化されていない無意識はあるのか。

三．ガタリによる記号系の三分類

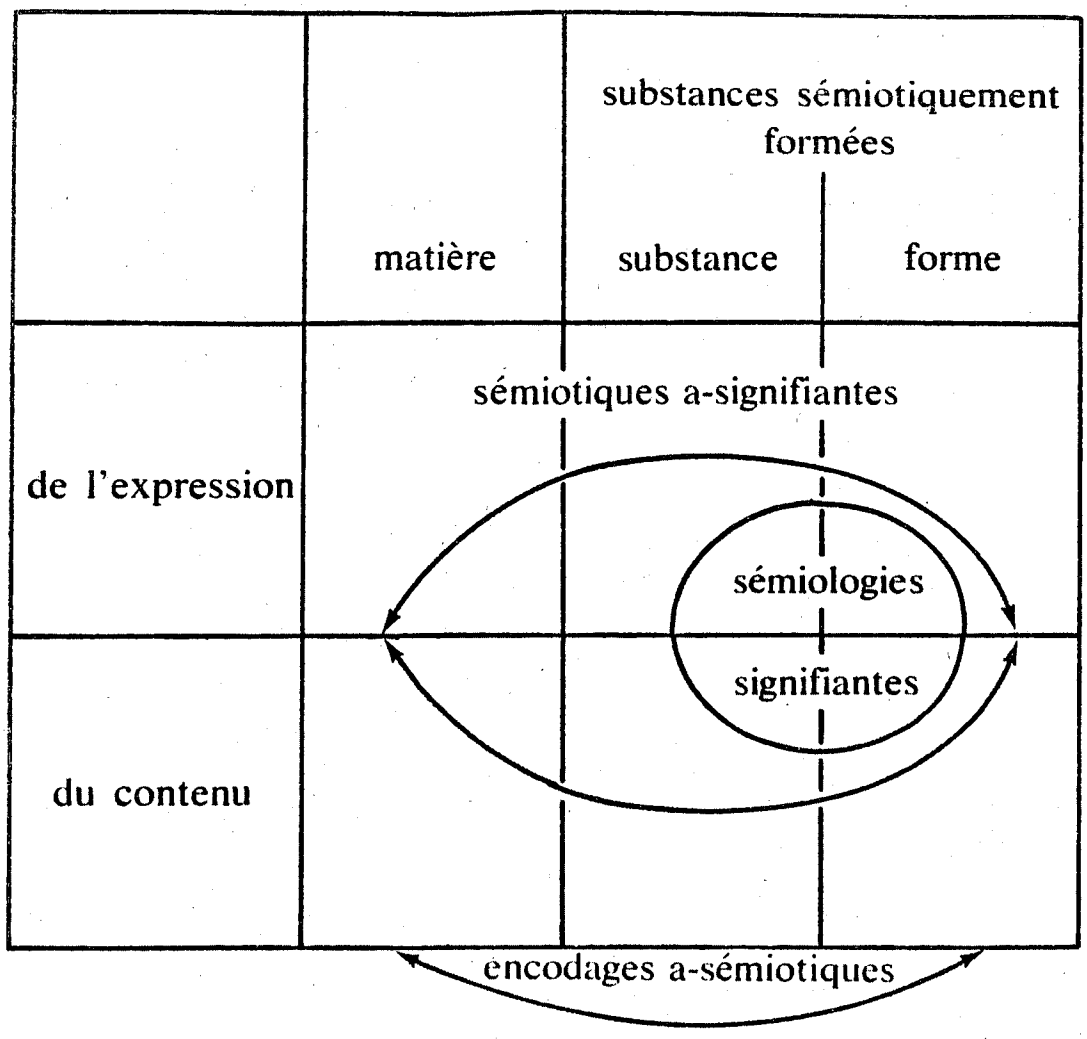
無意識が言語として構造化されているという精神分析の定式に従う限り、シニフィアンの記号学が唯一の求められるべき参照軸のように捉えられる。それは支配的な権力構成体に基づいて欲望を解釈し、裁き、抑圧する記号学である。このような認識に至る経路のひとつは、欲望をコントロールしなければならないほど危険でアナーキーなものとして捉える先入見にあると、ガタリは考える。ガタリの批判のひとつは欲望に対するこの先入見に向けられており、彼は欲望の生産性を認め、それを抑圧的な構造から解放するための新しい考え方を模索した。

彼は少なくともふたつのアプローチを採用した。ひとつはソシュール以後あるいは以外の言語学・記号論のなかにシニフィアンの記号学を超えていく記号論の可能性を探す方向である。もうひとつはラカンの理論を徹底する方向である。ラカンは精神の領野を想像界・象徴界・現実

界の三つに区分する。これらは簡略には説明できないほど複雑な理論構成をしているが、我々の関心に沿って次のことにだけ触れておく。象徴界とは、我々がここまで述べてきたシニフィアンの記号学や言語の秩序が特権的に機能する領野のことを指す。それに対して現実界とは、主体が象徴界へ参入することで永久に失われることになる領野、つまりシニフィアンの記号学では捉えきれないもの、言語化できないものの領野とされる。すると現実界は象徴界に参入している限りでは探索不可能ということになる。ところでラカンによれば、現実界に〈対象a〉と呼ばれる欲望の原因が位置づけられる。ガタリはここから象徴界を欲望が抑圧される領野、現実界を抑圧されていない欲望が運動している領野と捉えた。それゆえ欲望の生産性の解放が目指される限り、現実界を探索することが求められる。[3] これがラカンを徹底することの意味である。

しかし、その探索はいかにして可能なのか。ガタリの議論から次のようにいうことができる。現実界が探索不可能なのは、それが象徴界つまり言語の秩序に立つ限りのことである。言語の枠を超えることができれば、現実界の探索は可能になる。では言語の枠を超えるとはどういうことか。それはシニフィアンの記号学とは異なる記号論、ガタリの用語で非シニフィアン的記号論と呼ばれるものを思考することである。要するにガタリにおいて先に挙げたふたつのアプローチは一致することになる。これによって現実界は非シニフィアン的記号論の機能する領野として位置付けられることになる。

では、非シニフィアン的記号論とはどのようなものかを見ていこう。ここでは、それをできる限り判明にするために、ガタリの区別するその他ふたつの記号系も挙げておく。その前に、ソシュール以後の言語学者であるイェルムスレウから影響を受けて、ガタリが展開した理論を踏まえておく必要がある。論考「欲望のミクロ政治学に向かって」の一節である「制度におけるシニフィアンの位置」でガタリは、イェルムスレウのいう表現と内容の区別をソシュールのいう言語におけるシニフィアンとシニフィエの区別と同一視すべきではなく、より広い射程を与えるべきだと考える。そのためにこの表現と内容の区別をさらに形式と実質と素材という三分割とともに捉え直すことになる。つまり、まず記号を表現と内容に区別し、そのふたつをさらに形式・実質・素材に分割するのである。すると表現の形式、表現の実質、表現の素材、そして内容の形式、内容の実質、内容の素材というカテゴリー[4]を備えた表が出来上がる（RM, p.279 から抜粋した表を参照）。形式・実質・素材の関係は、形式を素材の上に投射するときに、ある実質が記号的に形成されるといわれる。この表のなかで、シニフィアンの記号学は表現の実質、表現の形式、内容の実質、内容の形式の四つのカテゴリーからなる範囲を占めている。つまり素材に関する部分がシニフィアンの記号学では捉えきれない。それに対して六つのカテゴリー全体を占めるのが、非シニフィアン的記号論である。さらにもうひとつ、その六つのカテゴリーの外部で非記号論的コード化が機能しているという。こうしてガタリによる記号体系の三分類が出揃ったことになる。それらをひとつひとつ具体的にかつ簡略に見ていこう（このまとめは『分子革命』「記号論の構築」の章全体とともにガタリ研究者のジャネル・ワトソンやゲイリー・ゲノスコの記述を参照している）。


substances sémiotiquement formées
matière
substance
forme
sémiotiques a-signifiantes
de l'expression
sémiologies
signifiantes
du contenu
encodages a-sémiotiques

（1）非記号論的コード化（les encodages a-sémiotiques）

自然的コード化ともいわれ、記号的コード化（他のふたつ）とは区別される。カテゴリー表の外部で働く作用である。ガタリはＤＮＡによる発生論的コード化を例として挙げている。ワトソンによれば、生物学的、化学的、物理学的な水準でメッセージやコードの伝達が行われており、例えば内分泌の調整やホルモン信号、エンドルフィン放出などの操作が含まれる。このコード化の様式は、翻訳可能で自律した〈エクリチュール〉に訴えることなく、物質の強度的領野を形式化する。またここでのメッセージは連辞的・範列的に開かれた言語構造には見られない硬直性を持つ。意味との関わりを持たないので解釈されず、物質に働きかける自然的領野である。

（2）意味作用の記号学（les sémiologies de la signification）

これは記号的に形式化された実質に基礎づけられている記号学である。[5] 表でいえば、表現の実質、表現の形式、内容の実質、内容の形式を占める記号学、要するにシニフィアンの記号学のことである。しかしガタリによれば、意味作用の記号学はより細かくふたつの下位区分を持つ。ひとつが象徴的記号学、もうひとつがシニフィアンの記号学である。本稿ではすでに言及しているが、もう一度まとめておく。

（a）象徴的記号学

身振り、姿勢、マイム、身体への刻印、儀礼など原始的な社会に見られる記号学で、子供の世界や狂人の世界の構築にも関与している。叫びや歌、ダンス、神経症の発作なども含まれる。ここでは普遍的意味作用のシステム（シニフィアンの記号学）に決して完全には翻訳できない脱中心化した記号的領野を作動させている。噛み砕いていえば、いくつもの表現の実質（音声、視覚、身体運動など）がシニフィアンという唯一の実質によって中心化されない状態で作動している。プレ・シニフィアン的記号学とも呼ばれる。

（b）シニフィアンの記号学

（a）とは逆に、シニフィアンの実質がその他の表現の実質の中心となり（〈シニフィアンの独裁〉）、翻訳や解釈が可能となる。この参照の実質は、原エクリチュールとして理解されうる。しかし、これはデリダが主張する全ての記号学的組織の起源となるひとつのエクリチュールではなく、「歴史的に日付を持つエクリチュール機械の出現、つまり巨大な専制主義的帝国の根源的な道具としてのエクリチュール機械の突然の出現」(RM, p.280) として捉えられる。これはエクリチュールが本質的に国家権力と結びつくことを示している。ここからガタリは、無意識における文字の審級という精神分析の主題について次のような考えを述べている。「確かに無意識において文字の審級は根本的ではあるが、しかしそれは文字の審級が原型的なエクリチュールに回帰するからではなく、専制主義的意味形成の持続性を表すからである」(RM, p.280)。要するにここでは、ガタリは専制主義的帝国の出現と無意識における文字の審級の出現を異なる水準での同様の現象として、また同時に実際の影響関係として描き出している。ただ、すぐに付け加えておかなければならないことは、すでに見たように権力構成体は国家に限らず、さまざまな水準やスケールで存在するという

ことである。これらによる影響も含めれば、無意識における文字の審級の複層性がうかがえる。

(3) 非シニフィアン的記号論 (les sémiotiques a-signifiantes)

ガタリ記号論の核となるものであり、カテゴリー表ではその全体を占めるものである。「脱領土化」や「物質流」、「機械」などのガタリのジャルゴンが頻出するのもここからである。とりわけ重要な概念が「ダイアグラム（図表）」である。これはガタリがパースの著作から見出し、それを独自に展開したものである。またすでに述べたことだが、この非シニフィアン的記号論はラカンの現実界の概念に対するガタリなりの拡張である。つまりここで述べられることがどれだけ精神と一見関係なさそうに思えても、欲望や享楽と深く関わっていることを忘れてはいけない。

非シニフィアン的記号論はポスト・シニフィアン的記号論ともいわれ、数学、科学、経済、音楽、芸術などの技術 - 記号複合体を含む。ポスト・シニフィアン的といわれるのはその働きのために部分的に言語記号に依拠しているからだが、ここではどんな言語的意味も必要とされない。つまり解釈が問題にならないということである。しかし、まったくの無意味というわけではなく機械的意味 (sens machinique) があるといわれる。では、機械的意味とは何か。この問いを考えるなかで、「機械」と「ダイアグラム」に狭義の理解を与えたい。

ガタリは非シニフィアン的記号論の特徴のひとつを言語機能の比較から述べている。それは、言語には外延指示 (dénotation) の機能があるというものである。言語は客観的に存在する対象を指し示す。この外延指示の機能にガタリはイコン、インデックス、概念などを含めている。それに対して非シニフィアン的記号論は、外延指示の機能を放棄するという。ここで起きることをガタリは次のように述べている。

> 実際、例えば理論物理学における記号と指示対象との対置は、一定程度の妥当性を失っているように思われる。今日、ある粒子の存在に実証的な証拠を与えることはもはや要求されない。理論的記号論の総体のなかでその粒子を矛盾なく機能させることができれば十分なのである。外的な実験の結果が記号システムを作動させるその時にこそ、はじめて遡及的に粒子の存在について問題が提起されるだろう。／…／従って、もはや粒子の存在をいちいち証明する必要はない。かつて基本的であった、時空間的測定の物理的効果によってその存在を物質化するという目標は放棄されたのである。／…／記号と指示対象との間にひとつの新しい関係が打ち立てられたのであり、それは直接的な関係ではなくて、理論 - 実験的なアジャンスマンの総体を作動させる関係である。(RM, p.244)

あるいは次のようにもいわれる。

> 新しいタイプの化学連鎖の発明やミクロ物理学における粒子の発見などは、いうなれば、それらの時空間的な座標だけでなく存在の条件をも決定するであろう記号的生産によってあらかじめ形成されるのである。(RM, p.281)

記号系のなかで矛盾なく機能できる理論的対象は、実験を通して否定されない場合、存在すると見なされる。ガタリは粒子の例を挙げているが、宇宙物理学のダークマターを考えると理解しやすいかもしれない。宇宙の誕生から現在までの時間経過と惑星の生成・分布状態との対応関係を考えたとき、未確認の物質（ダークマター）の存在を認めるのと認めないのとでは、認めたほうが説明のつくような場合、その物質は存在するとされる（ダークマターの存在を認めない場合、銀河の形成スピードはもっと遅く、現状の銀河の状況にはならないとされる）。これはシミュレーションというコンピューター上の実験によっても確認されている。

存在者の存在の条件と時空間座標を生産し物質に働きかける記号を、ガタリは狭義の「ダイアグラム」と呼んでいる。また意味も解釈も必要とせず、理論-実験複合体として機能するものを狭義の「機械」と呼んでいる。では機械的意味とは何だろうか。ダイアグラムの例として一般的にグラフや気温曲線が挙げられる。グラフはその構成に応じて、「質が変わった」や「閾値を超えた」などといわれるような、それが表示することになる現象の特異点を明らかにすることができる。このような特異点をダイアグラム上の意味、つまり機械的意味と解することができるだろう。とはいえ、ここにはグラフだけではなく、数学、経済、音楽、芸術なども含まれており、さらに根本的な部分で欲望と関わっていることを考えれば事態は複雑である。それぞれの分野でダイアグラムとはどのようなものか、そこにはどのような特異点があるのかを考えなければならない。しかしここでは各論に流れるのは抑えて、続けて理論の大枠を捉えていこう。

非シニフィアン的記号論において注目すべきは、ガタリが政治活動家として抵抗しつづけた資本主義もまたこの記号論に依拠して成立しているという点である。ガタリ自身が分析しているように、資本主義世界の組成構造は貨幣的記号、経済的記号、威信的記号などのシニフィアンの記号学から解放された記号からなる。その例としてガタリは貨幣が融資の手段となる場合や、あるいは株式市場での無意味な格子状の記号を挙げている。ガタリの入門書を著したゲノスコは、クレジットカードやデビットカードなどの磁気カード（磁気、Ｐｉｎコード、暗証番号などの記号系からなる）による電子上での貨幣のやり取りに触れている。ガタリは資本主義に経済的領野での言説の行使だけではなく、貨幣や磁気などの無意味な記号機械の統御と操作を見出している。また、資本主義にも権力の浸透を見て取り、資本主義が個人に対して、医者、子供、教師、男、女、同性愛者などの役割を付与し、それにまつわる意味システムに順応するよう要求することを分析している。

この節の終わりとして、意味作用の記号学と非シニフィアン的記号論との間の関連についてのガタリの例を見ておこう。子供が目を覚ましてから気分が悪いと訴えたとする。母親は子供が学校に行きたくないからそう言うのだと考える。しかし、母親は考えを変えて医者を呼ぶことにする。医者だけが子供に学校へ行ってはいけないと言う権力を持っているからである。この一連の過程を記号の観点から言い直してみよう。まず子供の身体のレベルで起きる象徴的記号学から母親の権力の水準におけるシ

ニフィアンの記号学（母による子供の欲望の解釈）へと移行している。そして次に社会的・技術的有効性をもって介入する医学的権力へと移行する。ここで医学とはその理論、技術、実験を備えたダイアグラムからなっている。この医学的ダイアグラムが、学校権力のダイアグラムを払いのけるのである（とはいえ学校権力もまた家庭権力を部分的に押し込めるという権力関係を持っている）。

権力はいたるところに浸透し、記号系の三分類は複雑に絡み合っていることがわかる。とはいえここで見るべきは、精神分析、権力、資本主義などのガタリ思想の主題が記号論に基づいて関係づけられていることである。ここからはじめに主張したように、記号論がガタリ思想の根底で一貫性を与えていると見なすことができる。

四、ダイアグラムの実践

ガタリによる記号系の分類を考察して分かることは、非シニフィアン的記号論がそれ自体では権力や資本主義に抵抗する理想的なモデルなのではないということである。むしろ、彼が「ダイアグラム化」というダイアグラムをつくる働きに言及するように、記号系の実践のなかで抵抗を構想することを提案していると考えるべきである。その実践のひとつが制度をつくること、集団をつくることである。これが制度分析の実践である。

制度分析の実践のひとつに、権力の垂直構造であるヒエラルキーの解体がある。例えば、病院内での医師を頂点とした看護師、ケアスタッフ、患者らの間の権力関係を問いに付すことが制度分析の役割である。とはいえ、患者らだけの関係、看護師だけの関係のような水平構造もまた役割の固定につながるために忌避される。このような権力の垂直構造と役割の静態化に対して考案され、実践された試みのひとつが「格子（grille）」と呼ばれる一種の役割分担表の使用である。これは、具体的にどのような役割があったのか詳細にはわからないが、院内のメンバーでいくつかの役割をローテーションしていくシステムである。これによって医師も看護師も患者もそれぞれその役割を変えていくことになる。時間の変化が職務に備わる身振りを変化させ、象徴的記号学を働かせることになる。また役割の固定化を防ぎ、ヒエラルキーの形成や関係の静態化を防ぐことになる。おそらく責任や決定の局所化を防ぐことにもなるだろう。また患者が調理場でメンバーの食事を用意するなどの労働に従事することで、金銭の流れも変化することになる。この格子というダイアグラムでは、資本主義がそうであったような、固定した役割を押しつけないような使用がなされている。

格子の例はダイアグラムの小さな実践のひとつである。ダイアグラムの働きの重要な点は、ダークマターの例で触れたように、存在者の存在の条件と時空間座標の記号的生産にある。これによって理論‐実験的存在者を生産するのである。制度分析はこの生産的機能によって主体の生産を目指す。しかしそれは個人としての主体ではなく、集団としての主体、ガタリのいう「主体集団（groupe-sujet）」である。それに対して「隷属集団（groupe assujetti）」と呼ばれるものもある。この二つの集団性について、『精神分析と横断性』にさかのぼって確認し、ダイアグラムと

の関係を考察しよう。

「制度を使った精神療法入門」（一九六二-六三）のなかでは次のように規定されている。

> 隷属集団とは、外部から自分たちの法を受け入れる集団のことであり、それは内的な法を引き受けることによってみずからを築こうとするもうひとつの集団とは異なっている。後者は自身を創設する集団であり、こうした集団のモデルは宗教的、戦闘的な社会の側により多く求められ、この集団の統合化は、この法を具現するその集団の能力に依存している。(PT, p.42)

これが書かれた当時、まだガタリのなかにシニフィアンの記号学と非シニフィアン的記号論の区別という考えはなかったので、ここで「法(loi)」といわれている概念をどう解釈するかは意見が分かれるかもしれない。ラカン的なシニフィアンの記号学における「法」と理解することもできる。しかし、ここでは制度の創設、そして集団の存在の創設を扱っていると考えるならば、ガタリ記号論の観点からここでの「法」をダイアグラムとして理解したほうが妥当であろう。すると、ガタリ記号論で言い直せば、隷属集団とは外部からダイアグラムを受け入れた集団となる。資本主義が男や女、同性愛者などの役割を強制してくるというすでに述べたような事柄は、この事例としてあてはまっている。それに対して主体集団はみずからダイアグラムを作り出して、みずからを生産する集団である。このようにみれば、ダイアグラムの使われ方の違いが主体化するのか隷属させられるのかを分けることになる。

五、言表行為の集団的アジャンスマン

ダイアグラムと集団性の関係に触れた今、もう一度「言表行為の集団的アジャンスマン」に戻って、その理解を深めたい。言表行為の集団的アジャンスマンは「言表行為の主体は存在しない」というテーゼと関連していることはすでに述べた。このことについて掘り下げてみよう。

この関連をわかりやすく説明しているものに『精神分析と横断性』所収の「制度を使った精神療法に関する哲学者のための考察」（一九六六）がある。このなかで言表行為について次のように述べられている。ある個人が何らかの対象を欲望し、そのことで悩み、誰かにそれを告白することで恥辱や罪悪感を抱くとする。ところでこの恥辱や罪悪感は禁止や禁忌に関わるので制度的なものといえる。つまり個人の恥辱は特定の集団とその制度に依拠する。またこのとき、個人とは社会階級や年齢層、家族などの交差するひとつの制度である。ここから次のことが帰結する。「個人が発話の言表行為の還元できない支えであることが本当だとしても、それでもなお集団があらゆる言語、あらゆる言表の効果の受託者であり、その先導者であり続ける。」(PT, p.90)

言表行為は個人的な行為ではなく集団的な行為であることが主張されている。ダイアグラムの観点から言い直せば、「言表行為の主体は存在しない」とは、話す主体が集団に先立って存在するのではなく、話す主体は集団の形成のされ方に従ってその集団から生産されるということで

ある。そして集団はそのダイアグラムや制度によってそれ固有の言表や言表行為を備えることになる。これが言表行為の集団的アジャンスマンである。われわれの言表行為は言語を扱うシニフィアンの記号学からなるだけでなく、さまざまな集団や制度に関わる非シニフィアン的記号論による編成(agencement)からもなるのである。またその編成は動的な場合もあれば固着してしまう場合もある。そして常にそこには権力の浸透が伴っている。

> 支配的言語は常に支配階級の言語であり、権力はシニフィアンの記号学を利用する、しかし、その本質的原動力において、権力は非シニフィアン的記号論を起点として機能する。／…／約束する、命令する、助言する、誓う、賞賛する、深刻にあるいは軽率に受け取る、冷笑するなどは、言語学的な行為であるのと全く同様にミクロ政治学的行為である。／…／各々の言表は、地位、カースト、階級に従って秩序づけられた言表の地層に送り返されうる。だから、言表行為の集団的アジャンスマンの位置づけについてのすべての問いは、言表行為の言表への折り返しの拒否を含んでいるし、また言語学的実質だけに還元することのできない言表行為の諸々の地層を検討することを含んでいるだろう。明確に述べられ、個人的に言表されたメッセージの向こう側で、分析は各々の言説を支え、解明し、脱構築する非シニフィアン的記号論の次元に向けられるべきだろう。その分析の対象は、テクストやシニフィアンの観点からすべてを説明しようと試みることではなく、むしろさまざまな力関係の把握であり、いわば欲望の機械状アジャンスマンの把握であるだろう。(RM, p.272)

支配的言語もそれに固有の言表行為の集団的アジャンスマンからなる。さらに言表行為がオースティン流の言語行為と結び付けられている。するとガタリ記号論の立場から、オースティンが発話内的力と呼ぶものを、ミクロ政治学における各集団の力関係や欲望の編成として捉えることができる。ここで問題となっているのは、あえて簡潔にいえば、言表における「意味の次元」を支える言表行為における「力の次元」なのである。そしてガタリは、この力の次元をオースティンが提示しなかった権力、集団、制度、欲望、機械、編成などの概念群によって対象化しようと試みているのである。要するに、複雑に絡み合う力関係や欲望の編成こそが、非シニフィアン的記号論の分析対象だということである。ここから、この力の次元をガタリが理解する限りの「現実界」といえるだろう。

支配的言語に抵抗する主体集団の生産とは、このような力関係や欲望の編成のなかで隷属集団化されていたもの、あるいは場を持たなかったもの(マージナルな者たち)が場をつくるということである。場をつくるとは、力関係や欲望の編成に働きかけ、その編成のなかに集団を位置づけるということである。そしてこの編成は現実界での実践なのである。この編成・再編成の実践にこそ、非シニフィアン的記号論あるいはダイアグラム化の本懐があるといえる。

むすび

精神分析は自由連想や言い間違いなどの「言われたこと」、つまり文字やシニフィアン、言表を分析することで、抑圧されている表象を顕在化させる技法として確立した。逆にガタリの記号論の構築は、言表行為つまり「言うという行為」に張り巡らされた社会的・権力的・政治的・集団的力関係や欲望の編成（言表行為の集団的アジャンスマン）を分析することを目指した。これが精神分析の言語観・記号観を拡張することでガタリが開いた視界である。

また制度分析の主題のひとつであった主体集団の生産も、彼の記号論、特にダイアグラムの思想に取り込むことができた。主体集団をそれゆえ理論‐実験的存在者と考えることができる。理論と実験は時には失敗するかもしれないし、書き換えられるかもしれない。しかし、それがまた新たな主体集団の生産に寄与することもある。ガタリとドゥルーズの「解釈するな、実験せよ」というスローガンは、ガタリの記号論の構築を追うことで、シニフィアン的記号学と非シニフィアン的記号論の差異に根拠を置いてのものであると理解できる。(6)

本稿では、ガタリの記号論が彼の思想に基礎を与えていることを示そうとしたものであり、その役目はある程度達成できたと考える。しかし、ガタリ記号論の展開すべてを追ったわけではない。『機械状無意識』やその他の記号論関係の論考群については稿を改めて、その内実を明らかにしたい。またガタリの記号論は難解であるとはいえ、すでに見たように分析や生産などの実践のために構築されたものである。今後は実際に行われている制度分析の研究を参照しながら、ガタリ記号論を使用できる形で取り出すことができればと考えている。

註

(1) pragmatiqueは、ガタリやドゥルーズの邦訳のいくつかでは言語学よりも広い射程を持たせる意図で「プラグマティクス」や「プラグマティック」と訳されている。しかし、ここでは言語学との関係を強調するために「語用論」や「語用論的」と訳すことにする。「プラグマティック」では、語用論の問題圏と、パースのプラグマティズムを源流とするその歴史が省みられなくなる恐れがある。それはガタリの記号論の射程を見落とすことにもつながってしまう。

(2) このテーゼはバンヴェニストから引き継いだものと考えられる。バンヴェニストがこのテーゼを考える過程においてフロイトとラカンの影響があったことを示す研究として、小野文の「フロイトの読者、バンヴェニスト」、『Résonances』創刊号、東京大学教養学部フランス語部会、二〇〇二年がある。

(3) ブルース・フィンクによれば、象徴界と欲望の関係はガタリが考えている以上に複雑である。彼によれば欲望は抑圧されることによって生み出されたものである。抑圧によって享楽が禁止されることで、欠如が生じるとともに欲望が生じる。そしてそれを埋め合わせるためにさまざまな可能な対象へと欲望は方向付けられることになる。つまり欲望は本来的に禁止などの法的な秩序に従っている。それに対して、法的秩序に無関係に働く「欲動」をフィンクは挙げているが、こちらの方がガタリのいう欲望に近いかもしれない。とはいえ、ガタリはあくまで「欲望」という用語に執着している。

ここにはラカンとガタリの欲望の特性についての考え方の違い（欠如を埋め合わせる欲望か、何らかのものを生産する欲望か）が表れている。

（4）イェルムスレウの理論はソシュールに倣っており、あくまで言語学の枠内に留まっている。「表現の形式」は個別言語の音韻体系、「表現の実質」は音声、「表現の素材」は音声になるあらゆる素材を指す。また「内容の形式」は形式論理学であり、「内容の実質」は思考の言語化であり、さらに言語の結合論と意味論に分かれる。「内容の素材」は言語化される以前の思考を指す。ガタリはこれを言語に限定せず、さまざまな記号表現と内容に妥当するように拡張して用いようとしている。

（5）「記号的に形式化された」というのは、表現と内容の二重の平面の上で形式化との関係を保持していることを指す。

（6）ダイアグラムという発想はガタリの同時代人であるフーコーにも見られる。研究領域の近さにも関わらず、ガタリとフーコーの思想的関係を主題として取り扱った研究は多くはない。フーコーの場合、ダイアグラムとは可視化可能性と言表可能性を結びつける外の力として提示されていることを考えれば、ガタリのダイアグラムとそれほどかけ離れているわけではない。ダイアグラムという概念を軸に二人の社会や権力の分析を接続できる可能性が考えられる。

参照文献

Félix Guattari

・*Psychanalyse et transversalité*, ed.la découverte, 2003 [略記号：PT]（『精神分析と横断性』、杉村昌昭・毬藻充訳、法政大学出版局、一九九四年）

・*La révolution moléculaire*, ed.recherches, 1977 [RM]（『分子革命』、杉村昌昭訳、法政大学出版局、一九八八年、『精神と記号』、杉村昌昭訳、法政大学出版局、一九九六年）

・『機械状無意識』、高岡幸一訳、法政大学出版局

・*Écrits pour l'anti-œdipe*, texts agencés par Stéphane Nadaud, ed.lignes manifestes, 2004（『アンチ・オイディプス草稿』、ステファヌ・ナドー編、國分功一郎・千葉雅也訳、みすず書房、二〇一〇年）

・*The Guattari reader*, edited.Gary Gensko, Blackwell pubrishers, 1996

・Janell Watson, *Guattari's Diagrammatic Thought : Writing between Lacan and Deleuze*, Continuum International Publishing Group, 2009

・Gary Genosco, *Felix Guattari: A Critical Introduction*, Pluto Press, 2009

・Jacques Lacan, *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse 1963-1964*, ed.seuil, 1973（『精神分析の四基本概念』、ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之ほか訳、岩波書店、二〇〇〇年）

・セルジュ・ルクレール、『精神分析すること』、向井雅明訳、誠信書房、二〇〇六年

・ブルース・フィンク、『ラカン派精神分析入門』、誠信書房、中西之信ほか訳、二〇〇八年

・チャールズ・サンダース・パース、『パース著作集2　記号学』、内田種臣編訳、勁草書房、一九八六年

・J・L・オースティン、『言語と行為』、坂本百大訳、大修館書店、一九七八年

・ミハイル・バフチン、『マルクス主義と言語哲学』、桑野隆訳、未來社、

一九八九年
・立木康介、『精神分析と現実界』、人文書院、二〇〇七年
・原和之、『ラカン　哲学空間のエクソダス』、講談社選書メチエ、二〇〇二年
・『ドゥルーズ／ガタリの現在』、小泉義之ほか編、平凡社、二〇〇八年
・『医療環境を変える「制度を使った精神療法」の実践と思想』、多賀茂・三脇康生編、京都大学出版会、二〇〇八年
・川崎惣一、「ラカンにおけるシニフィアンの理論」、国際文化研究所紀要一二号、二〇〇七年
・杉村昌昭、「フェリックス・ガタリと制度論的精神療法」、『現代思想』二九号、青土社、二〇〇一年二月
・三脇康生、「精神医療の再政治化のために」、『精神の管理社会をどう超えるか?』、フェリックス・ガタリほか著、杉村昌昭ほか編・訳・解説、松籟社、二〇〇〇年
・三脇康生、「精神科医ジャン・ウリの仕事」、『思想』九九八号、岩波書店、二〇〇七年六月

Les échafaudages sémiotiques de Félix Guattari (1) : les trois systèmes sémiotiques de *La révolution moléculaire*

YAMAMORI Yuki

Félix Guattari fut militant et psychanalyste. Cet article a pour but de présenter l'existence de la sémiotique chez lui comme une théorie fondamentale qui exprime ces deux aspects. Guattari aborde les " Échafaudages sémiotiques " dans *La révolution moléculaire*. Ces tentatives d'échafaudages est une critique contre la sémiotique ou le langage de la psychanalyse qu'il pratique lui-même. Guattari appelle la psychanalyse lacanienne « la sémiologie signifiante », et la dénonce comme étant une sémiologie dominante qui contrôle le désir. Avec cette critique, il propose trois systèmes sémiotiques qui permettent de penser la relation entre la maladie mentale, le désir, le phénomène social, etc.

Le premier système qui englobe « les encodages a-sémiotiques » indique par exemple l'encodage génétique d'ADN ou l'ajustement de la sécrétion interne par les hormones. Le deuxième regroupe « les sémiologies de la signification » et se subdivise en deux catégories : « les sémiologies symboliques » et « les sémiologies signifiantes ». Enfin, le troisième système se réfère aux « sémiotiques a-signifiantes » qui forment le cœur de la sémiotique guattarienne. Dans cette dernière, la fonction sémiotique du « diagramme » prend un rôle important. C'est elle qui met en jeu la productivité du désir soulignée par Guattari.

En outre, cet article vérifie comment ces systèmes sémiotiques concernent la politique ou le pouvoir et comment Guattari fait usage de ses sémiotiques pour résister au pouvoir.

mots-clés : sémiologie signifiante, sémiotique a-signifiante, diagramme, formations de pouvoir, agencements collectifs d'énonciation